

採択率が劇的にアップする 申請書の書き方

沖 原 理 沙*

1. はじめに

近年、我が国の大学等の教育研究活動を安定的に支えてきた公的な基盤経費の伸びは停滞し、特に国立大学においては2004年の法人化以降、減少の一途を辿っている。一方、イノベーションの源泉としての大学等の研究成果への期待は大変大きく、競争的な研究開発資金は急激な拡張傾向にある。図1に、科学技術振興機構(JST)研究開発戦略センター(CRDS)の報告書⁽¹⁾に掲載された、我が国の競争的性格を持つ主な研究開発資金の変遷を示す。これを見れば分かる様に、我が国の競争的資金は近年著しく多様化・複雑化している。多様化によるメリットがある反面、類似する事業も散見され、今後はそれらが体系的に分かり易く整理され、全体最適化されて行く事が望まれる。いずれにせよ、大学等の教育研究活動における競争的資金の獲得は、以前よりも重要度を増していることには変わりない。本稿では、研究者にとっては死活問題とも言える競争的な研究開発資金獲得のために、これまで競争的資金の獲得支援を数多く行ってきた著者の経験から、幾つかのポイントを述べたい。

2. 申請先としてその事業は適切か？

再度、図1を見ていただきたい。一口に競争的な研究開発資金と言っても、純粋に研究開発を支援する事業の他、研究環境の整備や人材育成の性格を含む事業も多くある。更に、研究開発の中でも、基礎的な原理検証の段階から、実用化目前の段階まで様々なフェーズが存在する。競争的資金の申請をする際、とにかく何でもかんでも考え無しに応募する研究者が居るが、数を打とうとするほどに、申請書1つ当たりの完成度は下がり、効率の面から言ってあまりよくない。また不採択が続くことで自分自身のモチベーションも

著しく低下してしまう。重要なのは、まず今後やりたいと考えている研究の目的や位置付けを自身の中で明確にし、それとマッチする競争的資金を厳選して応募する事であろう。逆に言えば、助成機関が求めている内容を募集内容からよく読み解き、それにフィットする様に申請書の内容を微調整するという姿勢も重要である。

また、競争的資金の規模が大きくなるほどに、これまでの研究実績が大きく問われる。申請書上で研究実績を上手くアピールする技術も大事であるが、そもそも実績が十分でない場合は、比較的少額の資金を獲得し、コツコツと実績を積み重ねながら少しずつでも規模を大きくしていく事が一番の近道である。

競争的資金は数年単位の物が多く、研究の持続性という観点では課題があると言わざるを得ないが、競争的資金はあくまで研究者が研究を推進するための手段に過ぎない。研究を推進する研究者自身がまず数十年スパンの研究人生を大きく想い描き、その中で今後数年の研究の内容や位置付けを明確にすれば、様々な競争的資金を渡り歩きながらも自ずと研究に持続性が出てくるのではないかと、そしてそれが結果的に競争的資金の効率的な獲得に繋がるのではないかと著者は思うのである。

3. 採択率が劇的にアップする申請書の書き方

この手の指南書は数多く世に出ており、様々な方が様々な事を述べている。それらを読めば読むほどに「一体どれが正しいんだ!？」と混乱してしまう方もいらっしゃるかもしれない。そんな方に対して、著者が述べたい言葉はただ一つ。「審査員の事を思いやって申請書を書いていただきたい」という事である。これは何も審査員に迎合しろという意味では全く無い。自分のやりたい研究を審査員に正しく伝え、面白いと思って応援してもらうために、ただひたすら分かり易

* 名古屋工業大学 産学官金連携機構；コーディネータ(〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町字木市29)
Why are His/Her Research Proposals Always Adopted?; Lisa Okihara (Organization for Co-Creation Research and Social Contribution, Nagoya Institute of Technology, Nagoya)
Keywords: competitive research fund, research proposal, writing skills, coordinator, university research administrator (URA)
2017年12月1日受理[doi:10.2320/materia.57.60]

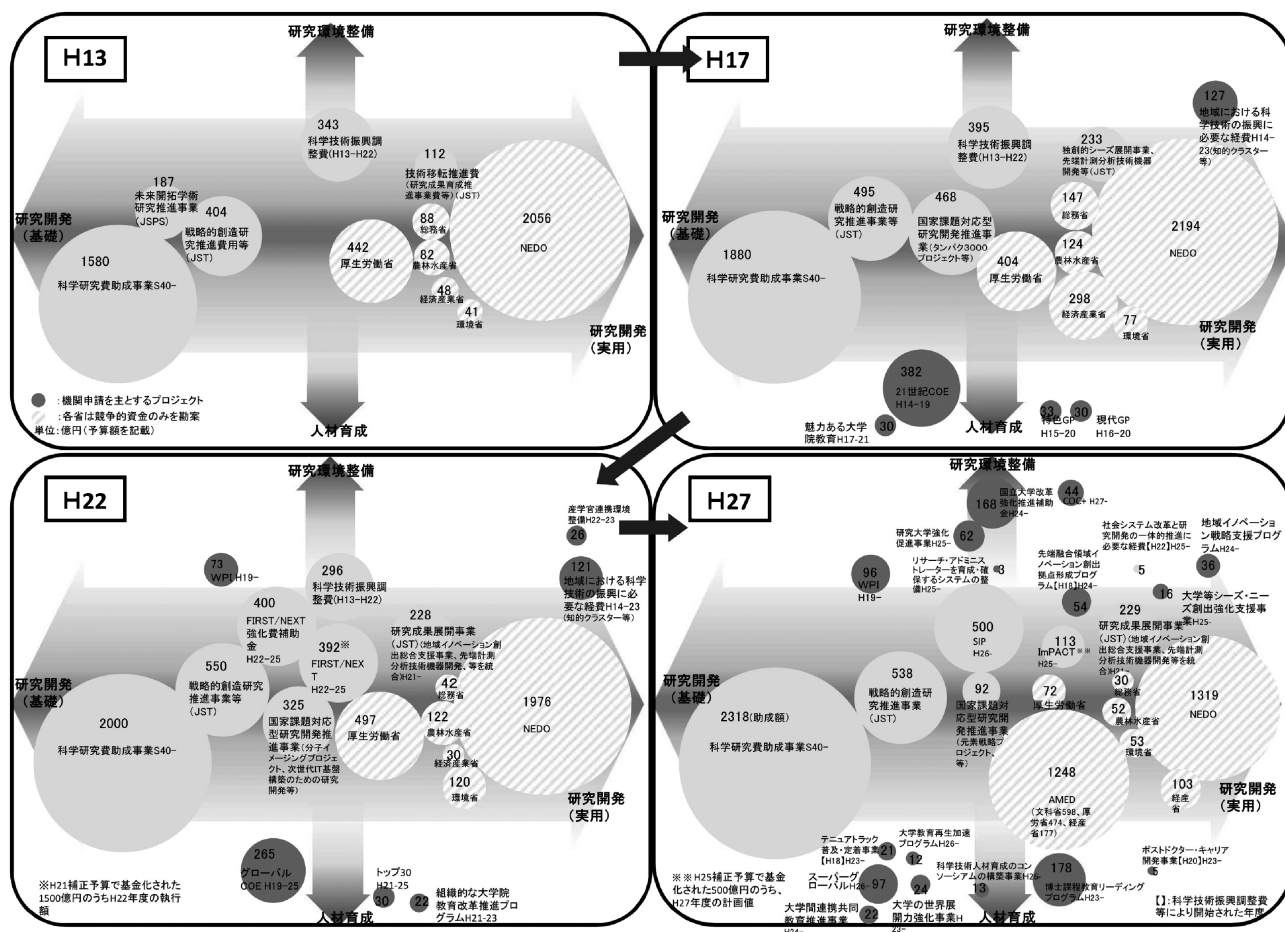


図1 競争的性格を持つ主な研究開発資金の変遷。

文献(1)のP.13, 図6の転載である。本図では、データ取得上の制約から、文部科学省以外の府省については内閣府が競争的資金と位置付けている研究費のみを、文部科学省についてはそれ以外の公募型資金も含めて表示している事に留意が必要である。

く、丁寧に申請書を書いていただきたいのである。

競争的な研究開発資金の申請書は、その種類に関係無く、研究課題名、概要、背景、目的、優位性・独創性、波及効果、研究計画で構成される場合が殆どである。以下では、紙面の都合もあるため、この中で幾つか特に重要な点に的を絞って具体的な申請書の作成方法について述べる事とする。

(1) 採否は研究課題名と概要で8割方決まる

まず思い浮かべて欲しい。審査員は申請者と同じ研究者等の有識者である場合が殆どである。そして、その研究者は大変忙しい方が多い。限られた時間で膨大な量の申請書を審査するとなった場合、どうなるか？申請書の内容を端的に表す研究課題名や概要を見た第一印象で大体の評価を決めてしまう場合が多いのではないだろうか。そしてその第一印象を覆すのは、なかなか難しい。見出しの「8割」という数はあくまで主観であり、何も根拠の無い数字ではあるが、審査員の先生や助成機関の関係者の話を聞く度に、研究課題名・概要の記述は非常に重要であることを再認識する。

このため、その研究課題名・概要には是非かなりの時間を

割いて考えていただきたい。まず、書き始める前にぼんやりと頭の中の構想を整理するために一度書いてみる。そして、中身が粗方書き終わった段階で、中身と整合が取れている内容になっているか、中身のアピールポイントをエッセンスとして抽出した内容になっているかといった観点でもう一度見直していただきたい。更に最後に、全体を通してほぼ完成した段階で、本当にこれで審査員に伝わるか？面白そうと思ってもらえるか？という観点で見直していただければ、これだけでもかなり完成度の高いものに仕上がるはずである。

(2) 「他に同じ研究が無いから独創性がある」は×

次に重要な項目は、優位性・独創性の部分である。例えば自分でお金を出してテレビを買う場合、皆さんはどれを買うかをどうやって決めるだろうか？実際に自分の家のどこに置くか、どんな風に使うかを想像しながら、これ位の大きさがいいとか、ハードディスクは内蔵していて欲しいとか、壁掛けがいいとか、色は赤がいいとか、色々と条件を付けながら数多ある機種の中から最も条件の揃っている1つの機種を厳選するのではないだろうか。申請書の評価も基本的には同

じである。この研究にお金を出す価値があるかどうか、それは他者の比較的近い先行研究や先行技術との比較で評価される。同じ様な研究や技術が既にあるのであれば(その様に審査員が感じてしまえば)、お金を出すのは無駄だと判断されてしまうだろう。

よく申請書を読んでいると、「この様な研究は他にはない。故に独創的である。」という論調を見ることがあるが、単に独りよがりな想いを書いているだけに見え、読む側からするとあまり印象は良くない。そもそも、人と全く同じ研究をしている場合の方が稀である。重要なのは、類似する研究や技術と比較し、どういう点が同じで、どういう点が異なるのかを具体的かつ明確に客観性を持って書き、更にその差異が価値ある差異であるかどうかを優位性と共に示すという事である。また、一口に差異と言っても、既にある化合物のこの構造が少し違うとかの末端の細かい話ではなく、研究のコンセプトや着眼点からして類似研究と異なるということが言えれば、その後の波及効果の大きさも期待出来るため、審査員からすれば大変印象が良くなることが期待できる。テクニク的なことを言えば、忙しい審査員に一目で伝わる様に、類似研究と比較するための星取表やポジショニングマップの活用がオススメである。

(3) 申請書全体を通じて整合が取れているか？

これまでに、著者は様々な申請書を読んできたが、そこで大事だと思う事は、申請書全体として整合が取れているかという点である。申請書を書いている研究者自身が大変多忙であるというのはよく分かるが、他の申請書等からの明らかな転用、それによって論理矛盾が生じたり、言葉遣いが途中から急に変わってしまったことにより、読む側が混乱してしまい、なかなか読み進まないということがよくある。これは同じく多忙な審査員もきっと同じように思うだろうし、これにより著しく申請書の印象が下がるのは間違いない。申請書を書く際は、是非全体を通して何度も読んでいただき、審査員がストレス無く読めるかどうか見直していただきたいと思う。

4. 申請書の文章能力向上の方法

上記では、申請書の書き方について、特に重要なポイントに的を絞って述べてきたが、文章能力は一朝一夕で向上するものではない。その様な中においても、比較的効率良く技術を向上させるための方法について、以下では述べて行きたいと思う。

(1) 書いた申請書を第三者に読んでもらおう

以前、これまで数多くの競争的資金獲得を支援してきたベテランの先生が、「自分が支援した申請書の採択率は高いのだが、自分自身が書いた申請書の採択率は一向に上がらない」という話をしていたことがあった。申請書はよく客観的に分かり易く書けとは言われるが、やはり自分自身ではどう

しても独りよがりになってしまう部分が出てしまうし、それに気付くことも難しい。また一度書いた文章に縛られてしまい、大きく構成を変える様な大改訂をする勇気もなかなか出辛い。その様な場合は、第三者、特にその研究分野についてそれ程深く知らない方に申請書を読んでコメントを貰う事をお勧めしたい。適切な方が思い当たらない場合、是非ともご自身が所属している機関に居る産学連携コーディネータやURA(University Research Administrator)といった職種の人間を活用して頂きたい。ただし、この様な職種の方にも、実際の所は様々なバックグラウンドの方が居るので、「親身になって忌憚のない建設的な意見をズバズバ言ってくれるかどうか」というただ一つの判断基準で、適切な方に巡り合っていただきたいと思う。なお、コーディネータやURAの方によっては、申請書の添削以外にも、研究者の研究とマッチする公募事業を探す手伝いや、研究成果の実用化に向けての協力企業を探す手伝い、国の施策を配慮した上で今後の研究方針について助言をしてくれる場合もある。是非良い協力者を集めて、効率的に有意義な研究を推進して頂きたい。

(2) 審査員を実際にやってみる

3.の冒頭部分で、「審査員の事を思いやって申請書を書いていただきたい」と述べた。この、審査員の気持ちを知る一番手っ取り早い方法は、やはり実際に自分が審査員をやってみることである。大切な研究の時間を捻出するために、なるべく余計な事をやりたくないという方も多くいらっしゃるかもしれないが、結果的にその研究のための資金を獲得することに繋がることを考えれば、審査員を引き受けるのも悪くない。そして、もし審査員を引き受けたのであれば、誠心誠意審査にあたっていたきたい。それが後の自身の糧になる。情けは人の為ならずである。

(3) 失敗しても諦めない

これまで述べてきた方法を実践し、質の高い申請書を書こうとすると、非常に長い準備期間が必要であることがお分かりかと思う。実際は、メ切的直前になって慌てて申請書を書き始めるという方が恐らく比較的多いのではないかと思うが、そういう場合はやはり採択率もそれほど上がらない。ただ、その様にして不採択になってしまったからと言って、直ぐにその申請書のアイディアを捨ててしまわず、決して諦めないでいただきたい。それが画期的なアイディアであるほど、一度の申請で上手く審査員に伝える事は困難であり、申請書の書き方の試行錯誤だけでなく、申請書に説得力を持たせるための下準備(情報収集や主張の根拠となる実験データ取得)が必要となるからである。競争的資金獲得の活動は不採択決定後からスタートと考え、審査結果通知を見てただ一喜一憂した後、忘れてしまうのではなく、申請書を色々な方に読んでいただきながら、どこが良かったか、悪かったか、しっかりと振り返っていただくのが理想である。複数の方の意見を聞くと、不思議な位に同じ意見が出てくることがあり、そこが間違いなく改善点である。逆に、皆がそれぞれ違

因みに、助成機関が自ら行う競争的資金の公募事業説明会の機会を活用し、助成機関との協力関係を構築するのも大変有効である。特に、個別相談会では、以前不採択になってしまった申請書でも構わないので見ていただくと良い。場合によっては、「この内容だとこの事業にミスマッチであるため、そもそも応募しても無駄」と単刀直入な意見を貰える事もあるため、早いうちから方針転換を図ることが可能である。